WASON

女學雜誌

第二百五十二號
明治二十四年二月十四日發

貴女よ　愛山生
時事の感五　巖本善治
美妙齋　ふみ子

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 252. FEBRUARY, 14TH. 1891.

EDITORIAL:—
WORDS AND DEEDS:—
MISCELLANEOUS:—Lady! (Aizansei). An interview with Mr. Yamada Bimiosai (Aino Fumiko).
HOUSEHOLD SCIENCE:—Hygiene. Some of the things nurses should know. Patient's Apartment (Shinko).
PHYSIC:—Holes on the bottom of the "Kama" or rice boiler (Saito).
NOVEL:—"Fuunkio." (Continued) (Unposhi).
CONTRIBUTED ARTICLES:—The Impressions given under the present social circumstance during the voyage on the Pacific. (Naruse Jinzo in America).
HUMOUROUS:—Change on the "Soshi" (Fumiko).
LITERATURE:—Japanese Poems. (Kazanshi no ya Sha Chu).
CRITICAL NOTES:—
NOTES AND NEWS.
CORRESPONDENCES.
CONCERNING WOMEN.

第二百五十二號目次

社説 言行錄 雜録 家政 理學 小説 隨感 寄書 笑草 文學 批評 時事 問答 新誌 通信 女報 週報

時事の感、五則
貴女！(愛山生)●山田美妙齋氏を訪ふ(生野ふみ子)
養生の鑑○看病心得の內、病室の事(森子)
釜の穴(小糸)
浮雲胸第三回(雲峯子)
圖書館に到りての感(清水豊子)○妾の眼線を偷みて(華のいもと)○仙人(仝)○自由の爲には(仝)
大平洋航海中の所感(在米成瀬仁藏)
草紙の變化(ふみ子)
和歌數首(東京案山子の家社中)
○盜人、人の縊れて死するを止め、密か男本夫の毒に當らんずるを制す
三圓五十錢、世界周遊實記○近古文藝、温古叢書
或る物を欠く○生物學○新婦人○政府は不德義の雜誌を禁止せざる可らず○醫學社會○廢娼論○存娼家の卑劣策○板垣伯の殖民論
數件(可愛子)
讀賣新聞●中正日報

家庭廉價 女學書類發行 女學雜誌社編輯

子供の談 紙數八十葉 郵稅なし 定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、菫の君。第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とタヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まゝしき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思儀の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮 紙數六十七葉 郵稅なし 定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案內の事。散步、かざり、宴會の事。食卓の上心得の事。婚姻の事。客を遇する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理 紙數百九十葉 郵稅なし 定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き、且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案內 紙數百廿葉 郵稅なし 定價五錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草 紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる凡ての心得を悉とく講述したり。

邦文學 紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

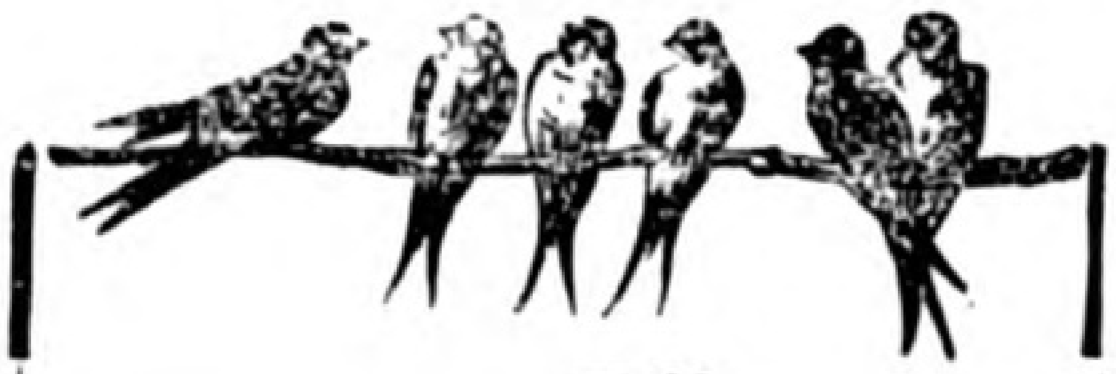
女學雜誌 第十五巻 第二百五十二號 明治二十四年二月十四日發兌

社説

時事の感、五則

○政府と教育

加藤弘之君近頃の公會演説に於て、「教育を人民に放任すべし、政府は之に關係す可らず」と云る議論は、最早昔がたりと爲り、西洋に於ても今は既に之を陳腐と爲ぬと言り。そは、國家社會主義などの事を力にしての論辨ならんと思はる。左れど、日本政府が教育に關係する目今の躰たらくにては、輓近の獨乙と大に勢ひを異にするもの無んばあらず。」政府の官人は毎度同じことを繰返して曰く、一國には一國の教育なかる可らずと、是大に宜し、左れど今の官立學校は果して是と云ふ定りたる國風の教育を施し得たりや、先づ其徳育に就て見よ、或は理學宗となり、或は孔孟となり、或は國粹保存主義となり、猫の目の二六時中變轉して定らざるが如く、浮草の彼方此方に漂いて安ずる所を一にせざるが如し、日本の國風教育なるものは斯く風の如くに移り行べきもの乎。又曰く、高等中學は大學の爲の階子なり、故に之を要すと、然ども我黨は今の大學をも必要と爲ざるもの也。政府は最低の普通教育を廣く汎く施こし行はずんばある可らず、たとへば慈母が幼子に向つて乳を與ふるが如く、高等小學以下の教育は、之を總ての邦人に給與するの政策頗ぶる切要なり。之と同時に最高の教育を保護し、國民の理想をして、高處に仰ぎ向はしむることを要す、但だし斯くあらんには、今の大學にても尚ほ不十分なり、又今の大學ほど餘計の人を作らずとも可なり、思ふに、帝室、學士會院を一洗して而して后ち之を保護し、斷えず二三十人の



前號社説 教育上、勅語禮拜の事を痛論す

雲峯子 盲女行 前號の大附録

帝室と基督教 前號の社説

有德卓識なる各科の學士を養成管顧せられんには、夫にて事足るべしと。官人又曰く、鐵道を敷くにも、電信を架するにも、鑛山を掘るにも、學士を要す、而して此等の學士は今の大學に非ずんば養成すると能はずと、言ふとを休めよ掛る老婆姑息の小掛念を、日本に鐵道を要し電信を要し鑛山探掘を要するの時とならば、之に對するの學士必らず起り來らん、彼等若し日本にて其學藝を學ぶと能はずんば、洋行して之を學ぶべし、大凡そ政府が不必要の事業を起し、未だ需要あらざるに徒らに大土木を企つるとあらば、然らば則ち製造したる學士を需要するあるべし、此時に於ては官立學校亦無るべからず、然れども是は獨り政府が自らの遣繰りに向つて入用するのみ、日本は敢て之を所望せざるもの也。吾黨は實に日本國風の學士を要ず、然れどかゝる學士は政府の學校に於て出で來べきものにあらず、政府の學校は時の政府風の學士を養成すると得、未だ眞日本的の氣骨ある學士を作り出すと能はざる也。見よ／＼、日本の民權の爲に刻骨鏤身したる學士ありや、社會を改良し時務を大導し一時の流行に逆らひ立てる學士ありや、吾黨は政府の秘書官に於て學士を見る、講義者に於て學士を見る、温和しき役人に於て學士を見る、其他に於て學士の俠骨に接すると極めて稀れ也。」大學と高等中學とに就きて論ずるに既に如此し、况んや高等師範學校をや。况んや高等女學校をや。况んや音樂學校をや。吾黨は政府が眞誠教育の發達を妨害すると莫らんを熱望する者也耳。

○神祇官

吾黨は神祇官を置き、親王を戴きて神社御陵の取締を爲さんとに贊成す、但し此は神道を國教と爲さんなどの謂れにはあらず、反つて神道を全く宗教以外に安置せんとを希ふが故なり。或學士は神道にも宗教の性質ありと云へり、若し其論法を以て論じなば、鰯の頭まにも亦た宗教の性質ありと言はずんばあらず。かゝる閑話は暫らく休題と爲すべし。兎に角、神道を宗教以外に置かずんば今後宗教の自由を確守して義死するものも出で來るべし、又之が爲めに思はずも帝室に十分の敬禮（敬意と言はず）を盡すとを得ざる折もあるべし。是れ吾黨終生の遺恨なりとす。

○殖民政畧

同胞斯く狹き限りに群がり／＼ては、空氣腐敗して何事も出來ず、快大宏遠の事業一つとして成功すまじき也。之れを以て、秀吉も遠征の策を執り、西郷も征韓論を叫破したり。彼等

何すれぞたゞ虚榮冒險の心を持てのみ此事を思起さんや。家康閉國の策を立てゝ、桃源に民を憫死せしめんとしたりき、此を以て、殖民の思想久しく起たず、今に於て之を起さんとするものは亦た様々の工夫を運らす所ろなかる可らざる也。演説もよし、實際の移住もよし。左れど文學と云へる更に大ひなる方便に依頼するの一策を忘却することある可らず。若し一個の小説ロビンソンクルーソーあらば、日本少年豈亦奮起せざらんや。人よ、田中鶴吉が瑣々たる一經歴談の、何如に國中を警醒したるかを想起せよ。

○社會改良運動の中心

社會改良運動の中心は、宗教精神の中集する一點より躍起せざる可らず。吾黨は深く基督教を信ずるもの也、故に自づから佛教儒道に溯からずんばあらず。左れど儒道佛教にして若し社會改良の事業に同情を表すとせば、其點に於て三教の反目逸背するは邦家の爲め遺憾極まりなきことと覺悟せり。而して社會改良の方策より算を打ち來れば、思ふに、三教目下の教制は共に宜しきを得たるものにあらず。信教の人須からく一週一日必らず集會して道を講じ靈を練るべし、之を號して安息日と通稱するは頗ぶる可なり（安息日の眞解は女學雜誌第二百九號に見ゆ）。安息日を守るの會場を會堂と云ふ。會堂は其精靈を修練するの地たると共に、亦た社會に向つて同志運動を創起するの中心たるべし。之が爲めに、會堂の建築法を一變し、中に殿堂めきたる一室を留んとはさすがに咎めず、宜しく周圍に慈善を施行するに足る樣々の準備室を設置すべし。或は青年會場を設くるも可也、或は青年の爲め下宿所を設くるも可也、或は慰安所を設くるも可也、或は未だ雇はれざるの貧婢貧僕を假寓せしむるも可也、或は貧民教育所もしくは貧民授産場を設くるも可也、惣じて如此き方向に於て宗教家の社會改良思想を活動せしめ、虎哮り狼吼るの魔世界に於て、温然仁然、慈を盡すの善行多く宗教家の愛ふかき胸中より湧き來り、其泉源の迸ばしり出る地を則ち斯の會堂と爲さんには、今の會堂僻を一洗するに於て有効莫大ならんとす。苟しくも然らず、宗教家はたゞ未來の爲に涙を落し、極樂の爲に學を語るに於て止まば、其人日本に在りと云ふと雖ども、日本の之が爲に澤を蒙ること少なし。夫れ口に見る所の兄弟を愛せずして、何如で見へざる所の眞理を愛することを得ん。

○氣　風

社會の人物は大別して三つと爲すべし、改革的の人物その第

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一種なり、從順的の人物その第二種なり、惡人その第三種なり。社會の戰爭は、第一種の人と第三種の人との間に懸る、其の强弱優劣によつて、善惡の氣風を生じ、氣風の流るゝ所ろ沿々たる多數第二種の人を化して、則はち一世一國の氣風を定む。憫れむべき斯の第二種從順の人は、赤兒の如く、白糸の如し、其染めらるゝまゝに隨つて或は善となり或は惡とならんとす。柔弱固より頼むに足らずと云へども、其類亞の多數なるによつて集合凝結して一大勢力となり、以て氣風善惡の權衡に輕重を定む。一世を支配せんとするものは、深く此の活機を知らずんばある可らず。知つて而して后ち日本今日の氣風を思ふに、痛慨胸を破らんとす。西洋國素より善國にあらず、然れども其ゼントルマンとは勇猛剛直温和清聖の謂にして、レデーとは、高潔貞愛清雅温柔の謂なり、而して今の日本の紳士貴婦人なるものは如何、紳士貴婦人とは男女が品徳の理想に對する標語なり、而して一般の氣風は今の如き標語を擧て其理想を爲んとす。嗚呼、吾黨の士大ひに宜しく改革する所ろなかる可らず。

言行

○日本歴史中の人物　みどり

一國の政治は一國の歴史に鑑がみずんばある可らず、此の譯を以ての故に、余は日本歴史を研究せんことを可とす。左れど己が品徳を修むるの上に就きては、二千五百年間の日本歴史中、未だ偉大崇高にして仰ぎて之を尊重すべきほどの人物あるを見ず。われ太はだ愾むと雖ども、遂に他の國史中に其人を求めざることを得ず。蓋し神を信ぜざる人の一生は淡きこと水の如し、其義烈香ばしからざるにあらねど、未だ永遠高絶に達せず、わが心奥の靈を寄せ、十分満足の理想として之に順ふこと能はざる也。

○何か樂しき　もみぢ

人の賞めは聽くに快ちよし、物の美は見るに快ちよし、世の權力は事を爲すに便よりよし、左れど此等のみを以て余は滿足すること能わず。かつて或る靜けき野を通り、仰ぎて天を望み、われは天地間の人たることを思ひ、靈性万物の爲に消磨せざることを確信し、魂しひよ、魂しひよ、汝ち何んぞ勇猛なる

と自語しぬ。此時の感尤とも樂しかりき。

○愛　しのぶ

世は浮きたるものにて、愛は泡沫の如しと云ふか、左れど余れ信ずること能はず。緑兒笑ひ、母之に乳を含ます、其間の愛何をもて幻ならんや。良人の心斷えず妻の像を印し、妻が生命たゞ夫を思ふによりて活く、其間の愛何を以て夢ならんや。友のかたらいは、蜜よりも甘く、艱苦を相分ちて、歡こびを共にす、世上輕薄の交はりに比へて、眞友の愛泡の如しとは覺ること能はず。あゝ誰か愛を以て迷ひと云ふ、之をしも迷ひと云はゞ、迷ひと云ふ言の葉の更に疑はしきことを疑ふ、彼れ寧しろ迷ひならざらんや。眞理とは、わが心に確と悟り固く信ずる事を得る所ろのもの也、嚴然たる意識、愛の如きものに至りて若し眞理ならずとせば、世上他に何にの眞理かあらん。花は落れども花なきにあらず、波は消れども波無きにあらず、愛に失望なきにあらずと云へども、之を以て愛なしと云ふことを得ず。あゝ愛なる哉、愛なる哉、余れは愛を以て生くるもの也。

雜録

嗚呼パー子ル

義俠の念ひ烈火の如くにして、山をなす怒濤の大勢に逆らひ、あはれなる貧農夫の爲に泣きて、高ぶれる驕農を叱し、多年

英國政治界の第一偉大の人物として、鷲の如く、獅子の如かりし、嗚呼大丈夫チヤーレス、スチウワート、パー子ルよ。當初たゞ六人の身方を以て身を起して立ち、今や全世界に雄名を轟ろかす。汝が義俠仁愛なる事業やうやく將に成らんとして、あゝ今や數千丈の谷に墮落したり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

貴女よ！

愛山生

現世紀の始までは零簡氣が窒酸二氣より成立することを氣付く者なかりしかども、太初に神が光りあれとの給ひし以來、恒久に此二氣は大氣を混成しつゝありしなり、自然界の史家＝即物理學者＝が近世まで、斯の如く空氣の成分に就て、無學でありし如く、人間界の史家＝即所謂歴史家＝が人間を混成する二大原素の其一に就て漠然たりしは、驚異すべき事實にてあるなり、勿論古の歴史にも女帝、烈女、淫婦、宮嬪、等の逸事は、所々に猶ほ籬中の牽牛花の如く、點染せられざるにはあらざれども、是は恰も彗星出て、赤烏現はれし等の異事と同じく、寧ろ偶然の粧飾として注意せられしまでなりし、女性は若く近代まで、人界觀察者の眼孔を逸したれども、而も實を言へば創世以來、彼等は慥かに、人間世界の非常なる動力にてありしなり、今猶若あるなり、未來も長へに若あるべきなり。

○○○○○

されば貴女てふ名はたとへ新しく現れ出たる者にもせよ、貴女てふ實は最も古き者にてあるなり。貴女の勢力は近代に於て最も多く認められ、社交上の王冠を頂かんと願ふ者、若くは社交上の朝廷に翩々たらんと願ふ者が先づ貴女より一臂の力を假らざるべからずと思料し、告白し、更に此主意を以て、其子弟を馴致するに至りしは、近代の事にしあれど、貴女の勢力は隱密なれども、而も堅固に古より存せしなり。外戚の例を引までもなし、夫の肥滿たる室町の將軍＝東山の大茶博士＝は何を以て、海内を其茶鼎の如く沸騰せしめたるか。義士をして當年を回想して扼腕せしむる延元帝の不成功なりし中興は其失敗の原因何處に在るか。飛ぶ鳥も落すべき勢力ありし幕府閣老、否殆んど日本の主人たりし、將軍の位置さへも、之を危くし、之を安くし、之を傾へし、之を建つるの勢力を有せし奥殿の怪物は何性に屬せしか。賢相松平越州が宮嬪の逆鱗に(?、)觸れて天下の惋惜中に其位を退きたるを、青年にして耳聞したる、史詩家（暫らく、尺寸廬主人の評語を假りて）賴襄は嘗て肺を患へて死の寢床に横はりしとき忽ち蹶起して「内庭」の篇を賦し慨然として曰へり。

事有如雷霆擊、如山岳壓、如江河決、而莫之能禦、天下奔走駭汗、雖有十一大諸侯、寧破其家、蹶其國、而不敢不奉令、而或問此令何從出、則如捉風捕影者矣。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

實に捉風捕影の如し。而れども此幽靈のごとき空氣が震雷決河の如き大作用を爲せしを見れば、貴女の勢力は眞に深池堅城の如くに潜存せしなり。　殺人劍は是れ活人刀なり。不幸にして日本の歴史は、斯の如くに、多く殺人劍たるものとして貴女を寫せしかども、其殺人劍たりしが故に余は亦其活人刀たりしことを信じ得るなり。　全じ史詩家が小楠公の排儀を詠ずる詩に曰へり。強收狂哭涙縱横、努力風雛九萬程、婦女家傳殉國劍、爲君護此小長城。嗚、楠母微つせば、妙齡可憐の姿を以て身を相摸の海に投じたる古の太子妃微つせば、夫と與に孤城を守り、自ら女軍を繰りて勁敵を退けたる、古の將軍の妻微つせば、甲斐の節婦阿栗の如きもの微つせば、赤間ヶ關の俠女阿正の如きもの微つせば、我々が祖先傳來として誇る所の、旭に香ふ山櫻花の如しと詩人の形容せる、雄邦人をして、昔し舌を捲かしめたる、日本魂なる者は夙に腐されてあるべき筈なりし。　滔々として流るゝ吉野川の源は、人知れぬ谿間に隠れてあるとも、炳々として燃ゆる淺間の煙は其柴。万丈の地底に潜むとも、勢力は其隠れたる、潜みたる所より發せしなり。　我高祖母の高祖母等は靜に墳墓に眠れるとも我等の品件は彼女が梭を投じて織成せし絹にてある也」院本は嘗て阿累といへる女子が鏡を照すまでは自家の醜を知らざりしことを書けり。彼女が自家の醜を知らざりし悲劇にも勝りて悲しきは、我日本の姉妹が多くは自家の勢力に盲目なることなり。　盲目なるが故に亦其勢力を妄用するなり。均しく不龜手の藥なり、而も之れを小用すれば、纔かに一家の口を糊するのみ、之を大用すれば大國の運命を決するに足れり。　吾嘗て之を謝氏の五雜組に讀めり、楊貴妃嘴を病へしとき、侍醫李姓なる者百計して効あらず、却つて一貼一文の膏藥を買ふて進めしに、嘴忽ち愈へて、賜賚千緡に逾へけりと。　一貼一文の賣藥も用るに所を得れば千緡に値するなり、況んや本性より大作用を爲すべき勢力を有しながら、之を小所偏所に誤用するは慨すべきの太甚にあらずや。　一顧眄の鼓舞も柔士をして豪將たらしむべき勢力を有しながら、一顰も壯夫をして寒心せしむべき勢力を有しながら、此世に香き清き風を吹かせて、沙漠の如き天地を化して江水汪々、雲山蒙々の化境に轉ぜしむべき勢力を有しながら、其同情の涙は以て地獄鬼に均き社會下層の沈淪者をして忽ち「ジエピトル」

の在す、蒼穹に逸し去らしむべき勢力を有しながら、其一瞥の白眼は雲上に翺翔する巨人すらも猶芒刺の背にあるが如く感ぜしむる程の勢力を有しながら、合整的に秩序的に之を大用すれば、以て宇宙の戰爭をして迹を收めしむべき程の＝噫余は之を信ず＝勢力を有しながら、唯之をワズカに林第の間、閨閫の内、蝸牛角上の如き一家の内にのみ小用し妄用せんとす、是黄金を泥中に擲ち去るに異ならざるなり、豈千古の恨事にてはなきか、畢竟するに是れ我貴女が自家の勢力を知らざるか故に、自ら敬し、自ら重んぜざるが爲のみ。

自ら知るとは、之を社會學的に言へば自家の位置、即ち勢力を知ることなり、宗教的に之を言へば自家の天職を知ることなり。貴女よ必しも創世記を讀まざれ、必しも社會學を繙かざれ、卿等自ら今日の社會を、卿等が得意なる、察地學者的の批評眼を以て看よ。今日の社會に二個の並行せる忌むべき現象あるなり。即ち公德の腐敗と私德の墮落となり。而も此二の者は只並行するのみならず、實は其根を同一の源に發しつゝあるなり。娼妓と間、髮を容れざる、細吟低唱の間に、眼を動かし、眉を轉じて、節操を黒ふせんとせる、藝妓を歡ぶ人を紳士と稱へ得べくんば、其紳士が果して正直に、熱心に人權を辨護する辨士であり得べき乎。公德と私德とは全く關係なしと云ふ勿れ、人心は到底一位なり、彼等が藝妓を買ひて日本の女性に恥辱を與へつゝある間に＝看よ天譴は踵を回らさず、＝藝妓は其復讎として彼等の品性を毀ちつゝあるなり。古人は曰へり、婦女は伐生の斧なりと、今の藝妓は日本の花とも云ふべき紳士(?)を無殘にも、精神的に吹落す、魔風にてあるなり。日々の國會議塲に聽聞者中の明星として蓮步を向け給ふとか承る貴女よ、卿等は果して尊敬すべき或るMPの後へに朦朧として現るゝ藝妓の幽靈を見ざりしか。彼等の恍惚たる眼睛は果して猶怪物に魅せられつゝあるを證據立はせざりしか。アヽ余は覺へず無益の談に流れたり。結局、日本に眞正の室家を生じ、社會上に蟠る妖雲が取掃はれ、節操が重んぜられ、清潔が歡迎せられ、愛てふ眞正の意味が間違なく解釋せらるゝまでは、政治世界も亦紛々五代亂離間たるを免るゝ能はざるべし。而して社會の車を驅りて此時天覆ひ、白日照すところの樂地に達せしめんには、實に貴女よ、卿等が自ら其位地を認め、其勢力を應用するに功を歸せざるべからず、東海散士の謂ける美人は歌ひぬ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勿謂裙釵料事尼、陽氣向處山可摧、
蹶起せよや貴女。！

山田美妙齋氏を訪ふ

生野ふみ子

言文一致の文章を以て、世を驚かし、其他韻文に、新体詩にさま〴〵思ひを凝すてふ文壇の驍將美妙齋氏に、幸なる紹介者あり、去る八日其神田平永町の居に訪ひて面晤しぬ。此日は唐突訪問しつる事にしあれば、長座は左こそ氏も迷惑ならめど、態と氏の本領ある小說界へは話頭を向けず、只婦人裝飾上の事などに就きて、一二の問を起しぬ。這は平素我女學雜誌記者の最も不得意とする處にて、美妙齋氏は其名のごとく美妙てふ事には、深く心を止め、かゝる事にも、注意濃なる人と聞けばなり。

女服に就ての氏の意見は

美術上よりいふも、便利上よりいふも、洋服の方宜しかるべく、而して洋服に良しや一二の弊害ありとも、其弊害なるものは、今日最早極點に達したるものなるべければ、此上其弊害を大にする氣遣はなし、用うる人の注意に依り、漸次其弊害を、去り得る事ならむと信ず、されど今一朝にして一般の日本女服を洋服に改ためしめんとは、勿論いふ可く行はれぬ事にしあれば、女服改良に志すものは、幾分か宛之れを獎勵するも宜しかるべく、又世の氣運は自然に洋服を用うる方に向ふべしとなり。

婦人の結髮に就ては

日本風の結髮美術に適したりとも、又束髮は見にくしとも一概にはいはれねども、日本風の結髮は、是迄結ひ慣れたる事にもあり、多くの年を經てさま〴〵に變遷し來り、幾許の思考を費して、自然に衣服なども、釣り合能きやう、結ひ成したる事にしあれば、見たる處にては、日本風の結髮の方、恰好よきやうなれど、束髮とても只今の儘にてはなく、幾分か工夫して、追々に其恰好能やうにしなば、輕便と衛生の點とに於て、是迄の日本風の結髮に勝るのみならず、美術上よりいふも從來の結髮に、見劣りせぬようになるべし、斯いへば極端の論に似れ共、似合うといひ、似合はぬといふも、主に習慣上より來す觀念に外ならざれば、今後依然として束髮の行はれたらんには漸次に、其美を煥發すべし、尤も今日兎角束髮を止め、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

舊來の結髪に復したる人多は、一時の反動に外ならざるべしと思ふ。殊に束髪を中止したる人に就て考ふるに、其多くは自ら之れ束ぬる事を得ず、束髪にするにも矢張結髪者の手を假りたる人に多かりしやう思はるれば、是等の人の束髪を止めたるは、啻に外見上のみならず、屢々之れを結ひ換へねばならぬてふ煩に堪ざりしが爲めならむ。

兎に角女服にもせよ、結髪にもせよ、追々は和洋混淆して、一の新風を造り出すべしと思はる、左れど今之れを折衷してこれ〳〵の風にせよといふ時は大變に六かし、只かゝる事は自然の成行に任せんのみ。次に、

染色の配置法

に就て問ひしに氏曰く、凡そ色の配置は、二色を合すれば白色となるもの、即ち理學上に所謂、補色てふとを心得て、用うれば、人目に映じたる時、多く美てふ觀念を起さしむるものなり。假令ば、襟が赤ならば、羽織は彼青たけといふ色を用うるといふ樣にすれば、赤と青と相須て、何れも誠に晴立ちて美しく見ゆるなり。夫れに引替へ襟の黒きに、羽織に亦大きく黒を用ひて、二者相撞着せしむる時は、假令其間の、若物に他色を用うるとも、少しく隔りて見る時は、黒のみ目に映じて、其人の衣裳は、只眞黒に見ゆるなり。故に衣類の色を配置するには、成るべく撞着せぬ色を用うるが肝要なり。日本の婦人は是れ迄餘り、左る事には注意せざりしやうなり、只賤業者などには、隨分心を用ひて巧みに色を配置するものもあれど、夫とて別に其理合を心得ての事にはあらじ。自然に鑑識に長けて、是はうつり宜とか惡しとかいふに過ぎず。槪して世が文明に進み、人の智識が開くるほど、其鑑識微妙じくなり、濃厚なる者よりは、寧ろ淡泊なる者を好むやうになるなり、故に色なども、未開の時代の人は、極濃きを好み模樣も大なる者に非れば、滿足せざりしかど、文明の人は淡色にて無地のやうに見る者を宜とするが如し、其は彼田舍人と、都人士との嗜好、相背馳するを見ても知らるるなり云々。

折しも午砲の耳邊に轟きしかば、餘談は他日に讓りて辭し去りぬ、歸途氏の言を回想して、思はず身邊を顧れば、僕は藍鼠の襟に、藍縞の着もの、剰へ黒の羽織を着したれば、是等をや、色の撞着甚しきものとやいふならむかと、素と〳〵意に介せぬ事ながら、坐ろに我不風流に驚きぬ、思ふに女學雜誌の讀者は、かゝる事を屑とし玉はぬ人多かるべけれど、流石に形而下の美も婦人には欠かれぬものと思ば參考の一端にもとてしるしぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

養生の鑑

森子

一。消化を助くるために常に靜かに食し、また十分に嚙みしめてのちのみ込むべし。

二。食時と食時の間に、間食を謹むべし、こは既によき程に消化せし先の食物に、また新らしき未だ消化せざるものを混合し、大に胃を害し、消化を妨ぐとあるべし。食事の時間は、大抵五時間宛の隔あるを要す、もし時のあまりに近きときは、前の間喰と同じき害あらん。

三。大食の害は云ふ迄もなく、健全なる食欲を得んが爲には、食事を規則正くなすにあり、其時も其量も常に均一ならざるべからず、空腹の時と雖ども、飽き足る迄に食する事を謹むべし。食物は手輕なるものにて量のあまり多かるまじきを要す。小兒の前に數多く皿を出す勿れ、食物多き爲めに、思わず手を出して食過ぎすることあり。其小兒の最も好ける品を擇て程好き丈け與ふべし。尤も好める品といへど健全に益あるものあらでは與ふ可らず。美味なりとて自ら食慾を制するの念なく、好める物とてこれを過すは、懼れ危險を思わざる無智の人とも云ふべきなり。

四。小兒の好まざるものを與るは、その好める食物を與ふるに比べ、消化の上に大なる差異あるものなり。好まざる食物は胃中にて消化し難く、好めるものは消化早し。

五。一の食物を多量に食するより、色々の食物を量少くも數多く食するをよろしとす。

六。熱き食物飲物は、齒を損するの恐あり。

七。食事中、飲物わ適宜にすべし、一盃にて十分なり、餘に渇したらん時は、食前に茶也湯也亦水也を濕す丈飲置べし。

八。冷水また氷水を食後にのむべからず、胃を冷かにし、消化を妨ぐるものなり。

九。珈琲又茶は、薄を飲べし、自然に濃ものを嗜むの習ひ起り來る故なり。濃き時はこれに湯を差して、必ずうすくすべし。

十。純粹なる水を飲むやう注意すべし、もし不純粹なるとを思はゞ、砂または木炭にてこれを濾し、然るのちに飲料とすべし。純粹なる水を食前に飲は、健康に利あり、則ち血液をして純粹ならしむべし、また消化にも利あり。

塩胡椒を用ることは、人々によりて其適料を異にせり。されば家政を司る人は、心して人々の嗜好を記し置くを要す。これ缺くべからざるの秘訣なり。

看病心得の内、病室の事

(第一)病室は病者の好む所こそ宜けれ、左れば概して全家中に、南又は西に向ひ、閑靜にして空氣の能く流通し、日光の能く透射する、明朗なる廣き室を最も良とす。

(第二)清潔と云ふとは病室に於ける一大要件なり。聊かたりとも不潔にして消毒の行われざるときは、之れが爲めに病者を害すること甚だ大なり、故に日々室内を洒掃し、飲食及藥液を盛る器物等は、屢々奇麗に洗ふ可し。室内の雜具戸障子は悉皆折々濕布を以て拭わざる可からず。

(第三)不必用の雜品を病室内に置くときは、徒らに看護人の煩らいとなるのみならず、傳染病等の時は、此等の品物の爲に、病毒傳搬の媒介をなすの恐れあるゆへ、務めて之を室内より遠ざくべし。

(第四)大小便など一切の諸排泄物は、病室内に決して長く留むべからず。又其受器は毎回必ず洗ひ、三十倍の石炭酸水を注ぎ置く可し。

(第五)疾病を看護するには、第一安靜を要す。左れば病室内には、高聲の談笑、無用の言語を嚴禁す。

(第六)病室内にて、他人の飲食喫煙するとを禁ず。殊に咳嗽の患者には、喫煙を尤も深く愼むべし。

(第七)臨時必要の器具を探ぐる爲め、時ならぬ騒ぎを起し、病者の安眠を妨害するとあるもの故、夜中に入用する器物は、褥に就くの前、預じめ病室に送り置く可し。

(第八)太陽の光線は身躰の榮養を盛にし、躰力を活潑ならしむるの効ありと雖も、眼病患者には故障あり。殊に戸障子の間隙より射入する光線は、之に甚だ害あるもの故、室内を暗黒にするとを要す。又夜間燈光の强劇なるも同樣害となるもの故、「ランプ」を用ゆるときは其圍邊に色着けの硝子被ひを用ひ、病者の眼を直ちに射ぬ樣用心す可し。

正誤。

前號の隨感餓死の末文末節「さぞ」は「も」の誤りなり。

理學

お釜の孔

小糸

「下女」奥樣御釜に穴が出來ましたが、今まいかけ屋に持て參りますと晩の御飯の間に合ひませんが、どう致しませうか。

「奥樣」ソレハ困たとヿ、晩の御飯はない筈だのに、………穴は針程だつて、ソレナラ紙か眞綿を能く捻て堅く御通し、眞綿ならなほ宜いよ、而して例の樣に水と御米を入れて成丈急に火をお燃き、膠樣になると大丈夫漏らなくなるから。

「下女」奥樣ソレデモ、火を燃したら眞綿が燒けてしまつて、復た漏りやしませんか。

「奥樣」否へ、私のいかけたのは一度や二度御飯を炊く間は大丈夫だよ、ナゼッテ御釜の水が始終眞綿に浸み出るから中々燒ないよ、其中に御釜が熱くなつて金が伸るから、穴が塞つて漏らなくなるよ。

「下女」御釜が熱くなると伸るつて、眞正で御坐いますか、飴で製造たんじやなし、可笑とヿ。

「奥樣」飴でも金屬でも木でも何でも、熱くなれば伸るのは同じヿだよ、お前が能く坊やのゴム毬の凹陷だのを、火に炙つて直してやるじやないか、暖になり次第に凹陷だ處の膨れ出るのは、毬の中にある空氣が熱の爲に膨れるからだよ。空氣の樣な瓦斯躰は何でも、温度が攝氏の寒暖計で一度昇る毎に、其容積の弐百七十三分の一宛膨れるから、若し百度迄熱すると二百七十三分の百丈膨れ、一斗の空氣なら一斗三升六合六勺三才となる割だよ、又た金屬では、物に依りて種々だが、お前などの知て居る金屬で云へは、鐵は攝氏の一度毎に〇、〇〇〇一二二宛伸び、百度恰ど湯の沸騰る迄熱すると〇、〇〇一二二丈伸びて、一尺の棒ならば一尺一厘二毛二絲となり鋼は一尺一厘二毛六絲銅は一尺一厘七毛一絲、眞鍮は一尺一厘八毛八絲となるよ。それだから御釜に明た小さな穴は終に塞る樣になるとは分るだろう、而して前の割で伸るから、大い釜は其割で大い穴でも、漏らなくなる譯だよ。

小說

浮雲胸　　雲峯子

第三回　如夢想

年光疾き事弃箭の如く、亦流水の如し、一日亦一日、一月更らに一月、移り去つて止まず、されば事變に遇はずんば之を知らず、大山深谷に入らずんば安んぞ廣野平原を過ぎしを知らん、境遇遂に變ずる事なくんば人世亦長夢の如きのみ、夢の如くんば何を以て、時の長短を知らん。

しづ子となみ子と今一室に對坐して話す、何故にか今日をはれと着飾れる美衣麗服、未だそをぬぎかへざるを見れば一室に歸りて間もなかるまじ、なみ子はいとうれしげに傍の卷物を取上げ「思へばこを一ッ得ん爲めに數年の苦學をなしてけり是果して何の用ぞ、嗚呼亦愚かなる事かな」と、舌頭にのみ嘆息す、心の内は如何に喜ばしからん、しづ子は之に應じて「しか云ふ可からず、こは是一枚の紙のみ、是のみ得んとて學びしにはあらじ、他に金銀財貨にもかへ難きものを得たらん、さなくば數年苦學の功、無論ある可からず」と云ふに言葉もつまりけるにや「さ云へばさなり」と輕く答へつ、なみ子は青き紐をとき、卷物を開き見る、兩端は卷きちゞみたればよくも見えず、見ゆるは「右者本校本科卒業候事」とある筆太の文字なり、されば始めは「證」と云へる字なる可し、左の方に半ば見えたるは○○女學校にてその上に年月日もあらん、暫し打ながめて茫然、手痿へたるが如く見えしは波子の胸中、夢の如く、幻の如く、一種云ふ可からざる喜びありしならん。

彼の卷物にて今日は卒業式とこそ知られたれ、茶菓の饗應も終へしにや、敎場の傍らなる客間よりあまたの人々湧くが如く出づ、貴娘には卒業せられ、いと喜ばし」と祝賀の辭を聞き、古き高帽をぬぎ、禿頭を手もて撫でつゝ「漸く卒業とはなりぬ、何行末の心にぞかゝる」抔笑みつゝ答ふる天保紳士あり「御令娘は年まだ若きによくも年長けたる人々と共に卒業し給へり」と世辭を云はれて齒のなき口を開き「彼れは幼きより學問を好みて……」と餘韻を殘して答ふる老母あり、あるは衣裳裝飾をほめ、またあるは髮の結ひ方など評す、且つ話し、且つ出で行きける人も幾十人なりけん。

殘れる人の數も多からじと見ゆる頃、手に折づめを携へつ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

語らひながら立出づる二人の紳士は、幾年月を學問に費しけん、愚かならぬ相貌かにあらはれぬ、學校の門を出る頃、一人の紳士云ひけるは「三番目に立ちて文章を讀けるは金谷五郎君の令孃とか聞く、柔和温厚の性質とは見みしが、如何にせん聲ひくゝして文章聞き取れず、題は家庭教育とか覺ゆ」と、亦他の紳士續きて曰く「然りそは金谷しづ子なる可し」「終りに立ちて女權論てふ題を掲げ、演説をなせしは誰れにやありけん、少しく輕薄の誹りを免れねど活潑にて英敏なりと見えぬ云々」と、亦一人は始の人は拙々なりと云へば、他は誰に云々なり抔、式場の出來不出來を話しつゝ歸り行く。

「妾が演説せし時、身躰は震はざりしや、恐ろしと云ふにはなかりしが何となく常と變れる心地せり」となみ子が云へば、震ひしとも見えざりき」としづ子は答ふ、亦なみ子は「御身は聲のひくかりし爲め、末席にありける人には聞へざりしならん、妾が常に云ひし如くなどて高き聲をば出し玉はざりしぞ、何の恐るゝ事かあらん、妾は最後なりし故人皆倦み疲れもやせんと、それのみ心にかゝり、心をつくして倦かしめざらん樣なせり」抔語りつゝく、是をきけば先きに紳士の評しけるは、なみ子なりと知られけり。

あまたの女學生打つれて、今なみ子としづ子の語り居たる室に入りぬ、年長けたるは先づ卒業せるを祝ひ、衣服帶地抔打見て彼是語る、若きは兩人の傍らに近づき、身躰を傾け、言葉を甘へて「御身等ははや卒業にてうれしからん、妾はまだ三年を要す」と打しほれて云ば亦一人は「妾はまだ四年を要す、いと長き事かなァ」と云ふさま實にうらやましげにぞ見えぬ。なみ子は若き處女等に向ひ「御身等はまだ年若く在はさずや、今よりかゝる事を云ふべき事かは、妾とて長く勉學に苦しみて今日あるに至れり、苦しまずんば樂なし、撓まず勉めよや」と氣取りて云ひ聞かす、しづ子は「今より見ればいと長しとも思はれん、されど月日の移る事早く、夢の間に卒業ともならん、心して勉強すべし」と靜かに云ふ、されど人の云ひきかす所にて解し得ざるにや、尙くりかへしつ「さは云ひ給へど、いと長し」など處女等は太息しつゝ云ふ。

久しく同窓の交はりを結び、一朝卒業するに當つては忽ち交友と別れ、他に移らざる可からず、「逢ふ事は別れの始めなりとは誰が云ひ初めにけん、かゝる事はなくもがな」と、送るもの送らるゝもの諸共に別離を惜しむも無理ならじ。數人の若き處女等今しもしづ子の傍らに坐し、袖を顏に押しあて、物

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

をも云はでありけるが、しづ子も亦涙をぬぐひ「御身等と別るる事のいとつらけれど何れ別るべきものなれば深くな悲しみそ、妾何處にありとも、亦屢手紙を以て御身等を訪ひ且慰めん、御身等もまた手紙を送ねかし、今別るは悲しき事の限りなれど、(凡ての事我等の爲めによからぬはなし)との御教へもあれば今の悲しみは他日の幸福ならし、今云ひ置かん事もなし、只教會に行く事をなゆめ怠り給ひそ」と懇に云ひ聞かすれば、處女等は袖にて蔽ふたるまゝうなづく。しづ子は其性質うるはしければ若き處女等皆母の如く慕ひ、別れをば惜しみぬ。しづ子も亦殘れる處女等をなつかしと思しなるべし。」

なみ子は其性質活潑なれば擧動言語靜ならねど亦人に疎まるることもなし、否亦かゝる人を慕ふも多しとぞ、しづ子は何處にか立出でけるあとに數人の處女等なみ子の室に入り、別れを惜しみて悲しみければなみ子は聲を高くし「などて悲しみ給ふぞ、今日を限りの別れかは、命だにあらば亦逢ふ事も容易かるべし、悲しむ事やある」と云ひしが倒悔し、處女等は別れを惜しみ居たり。

かくて卒業式のありける日なみ子及びしづ子等は朝より衣服裝飾の事などにうかれたち、式場にて壇に上り、文章讀み、演說なしける時は無論夢の心地して我ともなく打ち過ぎ、式終れば離別の辭のうけ答へ、且つは別れの悲しさに亦思はず時を過ごしぬ、さなきだに數月以前より、卒業式の時を心にかけ半ば夢の心地して月日を送りければ此日は更らに時の過ぐるも知らず、夜に入りて卒業せる人々相集り、語る所を聞けば「入校せし時卒業迄はいと長しとも覺えしが今かへり見れば一夢の如し」と云ふあり「いな隨分久しかりし」と述ずるあり、同窓同學の好み、いとうるはしく見えぬ。

今日は七月十二日、卒業式の翌日なり、卒業生一室に會して將來の目的を話す、勿論赤心を吐露するのみにもあらず、かく云はんは恥ちなりと思ふもあり、こは他人に語るべきにあらずと秘すあり、なみ子は第一に口を開ひて「妾は飽くまで女權擴張の事に一身を捧げんと決心す、嗚呼我國現今の急務は女權の擴張にある哉、諸君試みに見よ、歐米諸國今日の文明は何に由て來れるや、曰く女權の振與せしに原づく云々」と亦例の辨舌を以て滔々說き去りぬ、つゞきて立ち、家庭の改良論を述べて此事に盡さんと云あり、女子教育に從事せんと云あり、各人同じからず、しづ子は未だ定まらぬとて語らず、翌日校長の家を訪ひし時は「間もなく嫁せざる可らず、而

親妾の歸るを待ち給ふ」と云ひしと聞けば全く定らぬにも非る可し、友情温かに見ゆるも何秘す所あるは夫れ女子の心情か、嗚呼女子の心情か。
數人の卒業生が校長の許にて語りけるを聞けば、多くは込み入りたる事ありて、昨日懇親會にて語れる所とは同じからず、必らず一人づゝ行きて語るはそも何の故ぞ、只なみ子のみは終始渝はらず、不相替女權の事を云々す、淡泊正直の所はまさしく見ゆ、されど校長は「少しく自重の念を養へ」と間接に說き聞かせしとなん、輕薄なる勿れとの意なる由。
七月十三日荷物都て送りしあとにて卒業生は歸省す、しづ子は父が上京したれば伴はれて歸る、あみ子は暫らく四谷の叔母の家に止り、將來の方向を考ふ、故鄕の父母より疾く歸るべきよし告ぐれど再び上京せし時不都合なからん樣とて知人の間に何か問合はす事屢なり、されど思はしき事もなきにや、空に迷ふ心地して一月ばかり過ぎ、八月中旬に歸國せり、何立脚の地定らぬ心地せしなる可し、しづ子も兼て嫁ぐべき身とは知りしが嫁きし後は如何なるか、預想だもする能はざりしならん、要するに卒業前後より、暫らくは何も落ちつかぬ心地して、終日終夜凡て是如夢想。

隨感

圖書館に到りての感　　清水豐子

妾頃日少しく調べ度とあり、一日上野の圖書館に至る、此日や大祭日の當日なりしかども、館內幾百の椅子は皆熱心なる兄弟を以て充たされたり、紙上を走る筆の音、書冊を開閉する響きの外には、寂として、さながら人なき境の如し、妾は多くの兄弟達が斯くも熱心に、斯くも嚴肅に、研究に餘念なき形狀を見て轉た喜に堪へず、徐々此處を過ぎて樓上の婦人席に到りしに、あら悲し……婦人席には曾て一人の姉妹をも認ると能はざりき、妾は是に於て幾の喜に引替へ、殆んど是れに倍蓰したるの失望を來せり、嗚呼此廣き東京、此全國の學生を集めたる東京に於ても、猶且斯の如きかと長歎之れを久ふせり、左れど亦回想すれば、斯の如きの光景は啻に圖書館內にのみ止まらず、國會議事堂は姑く別物とし、婦人に密接の關係ある、敎育會、衞生會等の會合に於てすら、參會者中、婦人の數は實に寥々たるとにしあれば、圖書館內の事強ちに怪むには足らざれども、今試に是等の例を以て社會上に於る日

本婦人の働き場所を默想すれば、恰も此圖書館内、其幾十分の一を割きて之に充らるゝも、猶且其需用者なきに苦しむと同様、社會の一隅だも、容易に充たし得ざる事ならむ、左れど又自ら顧みれば、斯くいふ妾も、敬愛なる我師の導きに依り、出京以來此日を以て、始めて圖書館に到りたる事にしあれば、他に對して發せし長嘆大息も、心付きては殆んど自ら責め自ら詬るものゝ如きを悟り遂に人知れぬ溜息さへ、容易には洩し得ぬことゝはなりぬ。

如何に親愛なる姉妹達よ、卿等は何と思ひ玉ふや、我今日の日本國は、其政治社會にこそ、女人禁制の制札をも建てたれ、文學界教育界醫學技藝等の社會にありては、決して女人を容れじとはいはじ、而も其中に於る、熱情熱愛なる兄弟は、頸を延べ目を欹てゝ、却て我姉妹達の、到ると晩きを訝りつゝ居る樣なるに、姉妹は此際何故進んで其各志す所の途に進み玉はざる、文學なり教育なり、其他の學術技藝に於るも、女子に適當せるもの少なかるまじきを、而して是等の學術を研き、文學技藝を修むると、未だ必しも諸姉妹が、賢母となり良妻となるの行爲を、妨ぐるものに非るをや、妾は祈る今后我姉妹の多くが、演劇落語淨瑠理等の寄席に於て、其場所の多くを占領するを力むるを止めて、此社會てふ大なる舞臺の、淸く有益ある働き場所に、多くの美しき顔ばせを露はし玉はんやう、自他共に勵み、勵まされつゝ、進み行かむ事を願ふ。

小錄三つ

華のいもと

妾が眼線を偸みて

時めき玉ふの御方輕るからざるの任を帶び玉へり其智謀は當世に冠たりとは他人も許し御自らは勿論許し玉ふところなりこれに伴ひ玉ふところの北の方の榮譽爭で他人の羨まざる北の方二豎の祟りに罹りたまふ節此紅塵十丈底にては養生も心に任かせず、青松沙白の別莊こそよかるべし職務中なれど他人に托し置きておのれ伴ひ到るべし、滊車とはいへ途中の程も心にかかればとて同行し玉へり。此一言を聞ては何人と雖も北の方の滿足之れに過ぎずと想ふなるべし。豈計らんや北の方の胸間は聲なきの聲ありて曰く何のうれしき事のあるべきぞ一年中妾が眼線を偸みて梅櫻桃李……而して人前獨り妾を愛するの爲をなす。妾を愛することれ儀式的に過ぎずと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

自由の爲には

自由の爲には議員が二人や三人殺さることあるとも何の事かはと或方演説せられしよし成程國家の爲に事を爲さんと志ざすものはまさかの時に命ちを棄るは覺悟の上なりされど獨り如何せん一度棄ればかけがいのなき命ち、棄つべき程の事柄もなきに暗夜棍棒の伏兵に罹つて身命を傷つくは罌むべき事にもあらざればそれ相應に自衛せしとて咎がむ程の事かはと一人がいへば他の一人がそうよ伯でも其塲合に出逢つて見ねばどうだか……。

仙人

仙人が或人に書を寄せて約束通り筆を弄して足下の爲に忠ならんと欲すれど足下に忠なるときは米櫃に不忠ならざるを得ず依て已むを得ず米櫃に忠なるの家に向て筆を執るべしと。仙人もなか〳〵コスクなりました語を寄す仙人米櫃に不忠なるも酒樽に忠なるなかれ。

御年は失禮デスがおいくつで……と紳士がある貴女に問ふた若く見られたが女る故に。さやう女と申すものは見た處よりも年をとつたものはありません大低御らんなすつたら御分りになりませう。紳士、ハイデモあなたは御若いが見た所よりは年をとつて御いでらしひ故伺ひましたノデ……

寄書

太平洋航海中の所感

在米　成瀬仁藏

吾人は吾地球に乘て、一秒時七里餘の速力を以て縱に進行し、一時間五百五十八里の速力を以て、横に動搖すると雖も、已に吾人は其習慣性を受けたるが故に、更に之を覺ゆるをなし。余輩十三名の日本人、客月十六日横濱より、瀛船ペンキ號に乘込めり、船の長さ二町に滿たず、乘込人二百に足らずと雖も、日本人あり、支那人あり、以太利亞人あり、西牙班人あり、英人あり、米人あり、上等社會あり、下等社會あり、鳥類あり、畜類ありて、自ら數社會を作して、一小世界を代表せり。暫時にして此小世界は、軌道を定めて進行を初め、其速力僅に一時間十二英里半、横に振動するを一秒時一尺に充たず、然るに吾同胞人は、僅に三名を除くの外は悉く注船病に侵れ、其苦痛甚しく、重病人の如く寢床に伏し、殆ど三晝夜間、立たず、食せず(然れ共四五日を經て縱横動搖の習慣性を受け、各々平常に復し、終には大怒濤を見て却て愉快を感ずるに至れり)余も亦其苦痛者の一人にて、三日間病牀に臥し居たるが、此雜多の感慨交々吾心裏に浮び、殆んど制すべからず、何ぞや曰く日本人の小ささ、弱きさ、貧きさ是なり。

それ此行の船客は、日本人十三名、西洋人十二名、支那人十名にして、船子は合計百三十五名、内米人三十八名、支那人九十七名なりしが、米人は尤も身躰肥滿し、大且つ高く日本人は比較的に尤も身小さくして、且つ短く、注船病にかゝりし者も、日本人のみにして、他は平氣なり、而して上等室は、建野全權公使一族を除くの外は、悉く西洋人之れを占め、下等室は支那人、日本人にて充つ又此船中勞働者の賃金を尋ぬるに、西洋人は月給二百五十弗より四十弗に至り、支那人(多くは人足業)は二十五弗より十五弗を受く、(日本程賃銀の低き國なきと思ふべし)彼等の勞働に、耐へ且つ節儉に注意するは非常にして、貯蓄に熱心なる有樣を察するに、吾日本民の及ぶ處にあらざる者の如し。余は此仲間に入り、此を見彼を思ひ、如何にも日本人の貧しく、身躰の小く、弱きか(殊に學生)を目撃し慨歎措くと能はざるなり。

於是忽ち吾思想に浮出たる者ありて、大に吾精神を鼓舞し、吾をして欣喜雀躍に耐へざらしめ、恰も吾頭上に鬱積したる黑雲を、吹き拂ひたる心地せり、是れ實に吾日本固有の長處を認めたるなり、夫れ日本は、恰も有爲活潑の一靑年の如し、今尙ほ幼稚なりと雖も、確固不拔の精神に富み、一の大望を懷き、將來天下を呑むの一大英雄たらんとするもの丶如し、今已に小學校を卒業せしが、其進歩如何を視よ、政事、文學、敎育等は如何、鐵道、電信、工業は如何、實に進歩の速かなる、世界第一の神童と萬人より稱呼せらるゝにあらずや、之より進んで中學大學を卒へ、終には老古の歐米と競進を試みんとするものにあらずや、實に其目的の高尙にして、遠大なる、豈支那朝鮮に比すべけんや、余思茲に至て忽ち眉開け、初めて茫々たる太平洋を眺め、吾心を延すを得たり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

然れ共又茲に憂慮の情を惹起す者あり、曰く此神童の身体虚弱なれば、或は中途にして倒るゝの虞なきや又貧乏勝なれば、學資に窮し、十分其才力を延すことを妨げられざるや、是れ尤も危ぶむべきものなれば、之れを救ふの方を講じ、之れが豫防を爲さゞる可らず。

夫れ之れを救ふの第一策は、人種を改良するにあり、人種改良を實行するは、第一婦人に適當の教育を與へ、第二早婚の弊を矯むるにあり、吾日本人の矮小なる、素より種々の原因ありと雖も、其中、尤も重なる原因として算すべきものは、早婚なり、又余前述せし如く、此船中現在の舟子、米人は三十八人(壯年以上)の中妻を有するもの僅に七人なりと謂ふ、余一米人に問ふて曰く、汝は何故に未だ妻を有せざるやと、彼答へて曰く、余十分の財産を貯へて後ち妻を迎ふべしと、此れ米國一般の風にて、彼らが婚姻を重じ、十分成長の後、子女を養育するの貯を爲し、初めて結婚するが故に、其人種の强壯なるを知る可きなり、又余或支那人に、汝妻を有するやと問ひしに、彼答て曰く、余は三人の妻を有すと、而して語を續いで曰く、吾支那に於ては、家を建て妻子を養ふに十分の金錢を貯ふるときは、幾多の妻を有するを得、然れども金錢を貯へざれば、一婦をも娶るを得ずと、數婦を娶るは蠻夷の風語るに足らずと雖も、財産の數をもて、婚姻に制限を付るが故に、自ら早婚を禁止するの結果を生ずるが如し、然るに吾日本に於ては、未だ乳臭き少年も、子女を教育する資力なきものも、自由に婚姻するを得るのみならず、却て之を榮譽として行ふが故に、十分發育せざる人類多く生ずるに至るなり、殊に慨歎に堪へざらしむるものは、學生の微弱なるとなり、豈之れを教導する師父、之れを矯めずして傍觀すべけんや、故に余は法律に依り、或は教導により、男女十分に成熟し、且つ子女を教育するの力量を得るにあらざれば、決して婚姻す可からざるの國風を、養成するとの、尤も緊要なるを感ずるなり。

第二策は國を富ますにあり、

現今我日本は、人口年々に增加すと雖も、資産力は却て之れに逆比例をなすもゝの如し、之れを救ふの方、一にして足らず、或は下等人民に、金儲けの機會を與ふると、或は租税を輕減し、或は殖産工業を盛んにする等、枚擧に遑あらずと雖も、余の卑見を以て之れを見れば、今茲に大活潑なる運動をなし、之れを挽回せんとするには、從來の引込主義を全廢し、廣く世界と競爭を初むるにあり、今迄吾國は、外國と行通を絶ち、常に家庭に蟄居し、安樂に生活をなしたるも、今は電信、汽船、汽車等の便により、外國の隣家とはなりたれば、外國と競爭するの止むを得ざるのみならず、吾國の如く土地狹隘に、人口繁殖し、從て賃銀增々下落するの有樣に至りたれば、廣く活眼を世界に開き、商業家は世界を相手に商賣し、農業者は世界の原野を開墾し、學者は世界の學者仲間入りを爲し、以て萬國と競爭するの覺悟なかる可らず、然れば大に之が爲に刺激を受け、勇氣千倍、憤激事に從ひ、終には吾國に大商業家も出づべく、大豪傑も出づ可く大富豪家も生ずべく、大學者も生ずべけん。

同感の士よ、教育により、政事により、宗教により、文により、口により、以て早婚の弊を矯め、人種を改良し、亦吾四千万の人心を導びて、世界の廣きに向はしめ、十分吾國前途の成長發達を計られんと、切望に耐へざる也。

笑草

草紙の變化

ふみ子

「旦那樣ッ、、、大變でムり升。」と慌て込んで眼を圓くし、口を尖らせたる小僧の顏を、旦那と呼ばれたる人は不思議そうに詠め。

「ナンダ騷々しい、今奥で當家の主人と、大事の話しをして居ッタ處ダニ。」

と落付きたる旦那の調子に、小僧は益々熬立ちて、

「イ、エどう致して、グツ〱して居り升内にダ、旦那のお首は、なくなつちまうかも知れ升ぬ者アノソノ其處にその」と庭の木立の方を指さして、何かものいひたげにすれど、餘程ものに驚きたるものと見へ、齒の根ガタツキテ、あとの言葉は容易く口へ出ぬやうなり、旦那は苦々しき顏にて。

「何んだ一躰どうしたんだ、何かその、あすこの植込の方が暗いから此處に待て居るのが、怖いといふのか、怖ければ女中に斷はつて、内へ這入て待てるがイ、今直に歸るから、」

「チヨッ實に困つた奴だナ。」

と舌打しながら、再び奥へ行かんとするにぞ、小僧も今は絕

躰絶命、漸くに顫ふ唇を嚥み〆めて。

「マ、、旦那お待ち下さい、決して〳〵あわては致し升ぬ、實に一大事でムり升ッてば。

と旦那の袂を一心に捉へて、離さず、旦那も今は行くに行かれず、大聲出して叱らんにも他處の家なれば、外聞惡しゝと、餘儀なく引かれたる儘にイずめば小僧、稍氣を靜めて。

「旦那、あすこの木立の間に、二三十人計りの、壯士らしい人が隱れて居り升、ソシテ旦那のお歸りを待て居る樣子でムり升、實は此小僧めも、不及ながら平素旦那の御愛憐を蒙る身、委しい事は存じませねど、此頃は何でもお仲間中でも、餡の事に就ていろ〳〵とおせり合があるとの事を承つて居り升たから、旦那のお商賣の、菓子屋に縁ある、砂糖屋から、今夜呼びに參つたは何でも、餡に就てのお相談と、へイ〳〵憚かりながらお察し申上升たが、夫に就て不圖此の砂糖やの聟は、旦那と反對で、餡を柔かくしやうといふ方の菓子屋だといふ事を思ひ出し升たから、コイツ今晩は何でも油斷が出來ぬと思ひ升て、前刻にから氣を注けて居り升と、むこふの木影の方が、ザワ〳〵といふ樣でムり升から、ハテナと透して見升と、サア今來るぞ△ヨイカ＋イヤ今のは違ふ、此次のが越后屋の主人だ、手際よくヤレなど申聲が聞へ升たから、扨こそ大變と、急に旦那をお呼び申たのでムり升。

と一伍一什を物語れば、剛氣の主人クワッと怒り直に當家の主人を呼立て。

「大同團子の問屋、五等白砂糖の本家ともいふ大家の主人が、庭内に壯士を伏せて、菓子屋の一人や二人を傷けやうとは何事です、餡の硬い柔いは、我々菓子屋仲間銘々の考へで極るもの、砂糖屋の其許には入らざるお世話、餡が硬からふが、柔かからふが、其許は其專賣の、五等白さへ賣れて行かば能いではないか、娘の縁にひかされ砂糖屋の入らざる差し出、菓子屋の喧嘩は、菓子屋に任してお置きなさい、シテ庭内の壯士はどうなさるつもり……、指一本でも私に觸れさすやうな事があつては承知が出來ぬ、サア今私の目の前で、キリ〳〵壯士をお退しなさい。

と菓子屋ながら、甘口ならぬ詰問に、砂糖屋の主人困り切り

「イ、ヤ私は一寸も知らぬ、何しに私が庭内に壯士などを潜

ませやう、殊に貴公には、前年大同團子の受賣をもさせた位の中だもの何しに………

といへど菓子屋は中々承知せずどうしても其許が、庭内に潜ませたものに違ひないといふゆへ、流石の砂糖屋の主人もほと〱當惑せしが、漸くに思ひ當りたる事やありけむ、手を拍ちて。

「越后屋殿、さまで眞面目にお腹な立玉ひそ、昔から、不思議な事はいくらもあり、畫いた虎が脱けて出た例もあり、妻戸の馬が、庭へ下りて萩を喰ふた話しもあるものを、左すれば、多分あれも、晝間子供等が、梢に乾して置たそうし〇〇〇が、そうしに化けたのでがな御坐ろう。

といひしとぞ。

~~~~~~~~

願くは我が妻たるの許しを與へよ……我をして汝の愛たらしめよ……アノ様に書き送たからは必ず承諾の返事があろう、未だかなアー待ちどうダ……秘便……ソラ來た有難い何だエー妾には既に御子息より結婚の御話し有之承諾の旨を御返事致し候故に貴君には御答をいたす必要無之と存候……ソーカそんならもう悴が己れより先に結婚の相談迄して置て呉たト見える有難い〱。

~~~~~~~~

文學

池袋清風大人批（東京案山子の家社中）

寒松

尾崎

、冬枯の野中に立るひとつ松風のすさひになりにけるかな

（あらしのやさる所也けり）

日高

虫の音も千種の花も枯れにける野中にたてるまつの寒けさ

（冬しのそかりける）

評 調線のだるみたる詠は聴にくきもの也此にける又にのころの辭にて大に調線だるめり

竹内

、櫻井の昔を忍ふ老の松野中に寒く獨り立つなり

（なさめてひさつ枯れしたてるさひしさ）

評 老の松といふ事なし

枯野

尾崎

、古塚の尾花も枯て野狐のすみかあらはになりにけるかな

（の床　も）

評 狐の住所は必穴なるへし

冬旅

尾崎

、朝またき木曽のかけはしふみならし旅行く袖に霜はおきつゝ

（路の橋の霜ふみて立）（そさむけかりける）

評 ふみならしとは駒なとにいへり人ならば下駄はきて橋の上を渡るやう也旅行に下駄はく人もなきもの也

市村

旅枕ねさめてきけばふるさとの須磨のあたりに千鳥なくなり

（構　播磨かた　浦中）

評 故郷とは大かたは古き都のあさにいへり須磨は都にはあらさるべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

盜人、人の縊れて死するを止め密か男、本夫の毒に當らんとするを制す。

菅　茶山

或家に、盜宵より忍び入りてうかゞひ居けるに、夜ふけて、家の人、みな寢ねて後、一女子ひとり起きて、髮ゆひけはらひなどするあり、丑みつはまはたのまれずと待ちわぶる者もあらなんと思ふうち、さはなくて、硯を出して、こまぐと一通の書をしたゝめ、梁に繩かけて、自ら縊りて、前に飛ばんとするに臨みて、盜おぼえず聲あげて、やよ人々おき給へといひつゝ、抱きとゞめたり、家内の人、其聲に驚きて、其ゆゑよしをとひければ、えさらぬことありてかくは物せしなりとて、只なきに啼きぬるを、さまぐとときなだめ、二人の人に守らせ、さてそのとゞめたるは、如何なる人ぞと問へば盜なり、これもあからさまに其よしを述ければ、錢そくばくとらせてかへしたりとなり。又、人の妻をぬすみかよひし人あり、ある時、其妻の許に忍び居たるに、其妻、靑赤瓏子を膾に調じて、酒をあたゝめて、本夫にすゝむ、本夫は、夢にも知らで、頓て喰はんとせしを、密夫覺えず、はしり出てゝ其膾には毒あり、かまへて食ひ給ひぞとおしとゞめければ、本夫はおどろきて、其人の忍び居たる事など問ひけるに、是もあからさまに、しかぐのよしを答へしかば、其妻を追ひ出だし、密夫は、命の親なりと悦びて、兄弟の約をなして、睦びしとかや。

批評

○三圓五十錢、世界周遊實記

一靑年、依光方成氏、僅かに三圓半の金を懷ころにして、世界に周遊し、其見聞せる所ろを論述したるもの即はち此の書なり。精神は何如にも熾んなりと云ふべし、志望も遠大ならずとは云ふ可らず。左れど着眼は左して高からざるによつて記事に新らしく面白き事尠なし。

○近古文藝、温古叢書

第一編として、太田南畝が「奴だこ」、市川相筵が「老の樂」、莊司勝富が「洞房語園」、淺井了意が「東海道名所記」を集め極めて廉なる價をもて、例の博文館より出版したり。古物家が秘藏したる珍らしき書物の續々として廣く發兌せらるるは、人に知らせざる知識を知れるとを以て唯の博學なりと心得たる陋風を打破し、舊るき卑しむべき學風を一變するに於て、功ら尠からずとあす。特に、市場に今ま多くあらぬ珍書をのみ集めたるの心掛は、「百家說林」にも優て、一層重寶なり。

時事

○或る物を欠く

教育社界に在つては、徳育に威力（アウソリチー）なきことを憂ひとし、以ての外の方便を用ひて機械的の教科に生命を附け加へんとなす、左れど猶ほ或る物を欠けり。政治社界に在ては、國會開設と云ふこと、殆ど万能膏の如くに尊崇せられき、既に蓋を開き來れば、俄然老衰し、万人皆な望を絶んとす、今や或る物を欠けり。電信機よりも速やかなる電話の線八方に走り、瓦斯燈よりも明らけき電燈天地に煌々たり、事業社界の進歩驚ろくべきに似たり、左れど猶ほ或る物を欠けり。文章の技倆頓に進み、年少の文士花の如く錦の如し、左れど或る物を欠けり。あゝ到る處ろに、或る物を欠けり。或る物とは何にぞや、確かに道を信じ、博く人を愛し、身を犠牲にして、義務の爲に全力を獻ぐるの生命即はち是れ也。今や到る處ろに此生命を欠けり。

○生物學

生命あるもの初めて生命あるものを生む、自然發生（スポンチナス、ゼチレーション）の臆妄は今更ら言ふ迄もなし。左れば、人物を生むものは、人物なり、精神家を生むものは、精神家なり、彼の到る處ろに欠乏したる生命を生むものは、即はち亦た此の生命あるものならずんばあらず。兄弟よ、大危機日々に近づく。須からく身を殺して生命を日本人の感覺中に銘印し、無味寂寞たる日本歷史中に一生面を開きて、上帝を信じ、博く人を愛するの品徳を之に刻入すべし。

○新婦人

新婦人の品格を定むるも、口と言葉とのみをもて足れりと爲す可らず。唯だ斯るものに打寄らんは、鳴る鐘響く鐃鈸によつて、戀愛の心を滿たすに均し。活ける新婦人を作らんには、亦活ける新婦人の品格に則つとることを要す。壓制の婚姻と戰かふて、淸き節を露はすの婦人、男子の無禮を斥ぞけて之をして崇拜するに至らしむるの婦人、煩らひに耍ひず、歎きに能く耐へて、高く愛と眞心とを表白したる婦人ありて、初めて一般女學生を導びき、其新品格に倣ふことを得せしむ。今は先づ新婦人の活ける模範を要す。あゝ、今の世界率先者よ。公等が責め、最と極まりて重大なり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

政府は不德義の雜誌を禁止せざる可らず

同志の輩、警視總監に面して、醜業者が白日堂々公けに會するとを禁すべしと述ぶ。總監固より同意見なりとして、其の會議を制止したり。吾人「存娼雜誌正俗のかゞみ」なる者を見るに、醜汚無慚、何ものにも比へん方なし、一日も日本君子國の文學社界に公けに發行せしむ可らざるのものなり。若し之をして自由に横行せしむとせば、醜業者の公會を制止すと云ふと雖も、將何の功かあらん。吾人はかゝる不埒千万の文書の速かに禁止されんとを望む。社會の風俗の爲に熱望す。彼等がホームの爲に熱望す。我國の品格の爲に熱望す。

○醫學社會の廢娼論

衛生論をもて存娼の唯一城廓とするもの、須らく驚ろき死すべし。心ある醫博士は大率ね公娼を廢するとに同意するなり。近日、府下同志の醫學士率先發起して、一大廢娼演說會を催ふし、世論の迷ひと怠たりとを責め敎へんとはなす。

○存娼家の卑劣策

存娼家巧みに反間を放ちて、廢娼同志者の間を離反せしめんとし、又さま〲の謬聞を新聞紙上に製造せしめて大に廢娼論者の名譽を傷つけんとす。小島官吾氏に對する近頃の怪報の如き即はち其の一例なり。同志者大に警戒せよ。

○板垣君の殖民論

無骨庵

余輩一日板垣君を、礫川の邸に見る、君温乎として坐に就き、徐々髯を撚げ、說き出して曰く、我邦目下の有様は、政治上の腦充血とも云ふべきなり、今にして、之が散治の策を講ぜざれば、遂に其患や、測り知るべからざるに至らむ、何れの世、何れの國にても、一大變革のありたる後は、其氣必ず一方に散逸せざるべからず、彼の佛國の革命は、遂に獨國との交渉を惹起し、我が國戊辰の變は、逸して征韓論となるが如き、到底免るべからざるの數なりとす、左れば今の政熱を散治するの法は、殖民事業より善きはなし、且や我邦の貧弱を醫するには、小刀細工の姑息療治は不可なり、當に一大經綸を立て、外國殖民會社を起し、茲に壯丁を驅て、經濟上の一大戰爭を初むべし、予は前日「日本人民の覺悟」を題して、自由新聞に論じたる如く、我邦の方向を爰に取らんとす、と意氣躍然たり、ア、壯なる哉平民伯。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

可愛子

問。文學上に付き、心に浮びたる隨感等投書致さば、御取捨の上、取るべきものは、雜誌に御載せ下さるまじきや、伺上候、（愛讀生松頁子）

答。頁好なるものは、掲載致します、併し紙面の都合にもよります。

問。私は近頃、高等小學校を卒へ、法律を修めやうと思ひますが、家用の爲め、遠く笈を負ふとが出來ず、又學校に通ふとも出來ません、ですから、家に在りて、師に付かずして、講義錄などにて、獨學する方法はありませんか。（京都三條高倉的法生）

答。法律の講義錄では、日本法律學校、明治法律學校、和佛法律學校、東京專門學校、東京法學院、此五校から出るのが宜しう御座います、郵券二錢を封入して、右の學校に宛て、規則書をお貰ひなすつて御覽になつたら、よくお分りになります。

問。私は貧民に多くの金を出して救ふとが出來ません、どうか出す樣になる法を教へて下さい、（京都的法生）。

答。困つた御尋れです、固より譯も道理もなく、無暗に貧民に何かを與へるなどばいけますまい、けれど眞の窮民、寄る邊もなく、助け手もなき躍を救はんとするは、人情の常であらうと思ひます、救助すべき貧窮人か、救助すべからざる貧窮人かは、別問題として、眞に助くべき貧窮人であるならば、之を助くる、助けないは、人情の厚薄深淺によるものでせう、（勿論施す錢の無いのは詮方ありません）されば、神を愛し、人を愛するとにより、、自分の感情を發達させるとが必要です、且アナタは、多く金を出す云々と申されましたが、斯ふ云ふ時に所謂、金の多少は其金額によるものではありません、イエスが貧しき女のレプタ二つを投げ入れたるを見て、他の富める者よりも、多く入れたりと仰せられし事、佛書に長者の万燈よりも、貧女の一燈の方が光を放つたさいふとなどがあります、施ば志が第一です。

問。船の名に丸さいふ字を附けるのは、どふいふ譯ですか、（一愛讀生）

答。人の名に丸さいふとを附けた所から、船にも丸さいふとを附けたのです、物變り星移るに隨て、人の名の丸さいふとは廢り、船の名の丸ばかり殘つて居ります。

新誌

可愛子

●讀賣新聞　は七日の紙上に於て、豫算の議決に同意を表するは政府の得策なりと題し、豫算問題は愈よ本會議に移れり、余輩竊に政府の爲めに圖るに、豫算の議決に對しては、硬軟何れに決するとも、政府は快く同意を表するを以て得策なりと信ず、蓋し滿天下の衆人は政府を疑ふと益〻甚し、而して其疑の鬱積は、終に帝國議會に破裂せり、看よ夫の軟派も、硬派も皆疑念を懷くにあらずや、此疑念若し散ぜずんば、政府と議會の間、圓滑なる關係起らず、然らば何を以て此疑を散ぜんか唯政府に於て、豫算に對する議決を容るれば可なり、之を容れて行政の運轉に障碍を及ぼさずんば、國家の大幸之に越したるとなし、若し又實際行政の運轉に障碍を感ずるか、政府は次期の議會を得て、其事實を證明し、更に增額を求むべし、議會は多年謂れなき疑團を懷きたるを初めて覺り、直に其請求に應じて、爾後又重ねて政府を疑ふとなかるべし、これ豈政府の一大得策にあらずやと、諭すが如くに論告せり、政治家の量は海の如きを貴ぶ、在朝の政治家、徒らに心配するとなく、宜しく讀賣記者の勸告を容るべき也。

●中正日報　は八日の紙上に於て、會社保護と題し、論じて曰く、今や保護金の下に營業する會社を保護するの時代は既に去れり、其人民海陸運輸の道に拙く、爲めに國利民益を停滯沮格するに當りては、之を奬導する固より政府の職分なるべし、然れども人民旣に之を熟知し、自ら起て之に任ずるに及びては、政府は、其保護金を停止し、更に他の有益にして、國家に利を起すべき事業に轉用せざるべからず、而して政府若し會社の保護を停むるを憚らば、議院の決議を以て政府に施行せしむる亦何の妨かあらん、彼の日本鐵道會社と、日本郵船會社との如きは、今に至りては一金の保護なきも、十分に其盛業を期するものたり、何を苦んでか、故らに政費を割て之を助くるを須ひんやと、正々の議、堂々の論、殊に其鐵道會社の橫着なりし點を擧げ、保護會社が、或る議員を籠絡したる云々の流說を擧げて論ぜし處、殆んど利劍骨を刺すの慨あり、此論の如きは、其中正の名に負かずと云ふて可なり。

通信

可愛子編

●三田尻通信

大日本私立衛生會山口支會附屬產婆養成處記事（上）

一昨廿二年十月十五日始業爾來漸次入學生を增加し廿三年一月十一日開校式を擧

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

行す生徒の數二十七名、廿三年四月下旬に至り第一期試驗を廿三年十一月上旬に至り第二期試驗を擧行せり第三期は廿四年四月上旬と定めたり、學科は孰れも漸次進歩し解剖學生理學の如き教科書の朱氏產波論察考書の摘錄講授の如き大抵結了し又は結了せんとしたれば勢實地演習に着手せざるを得ず從來と雖とも適宜實地に臨み演習せし塲合も少なからざりしが今回は愈々妊產婦を募集するの方法を設け姙婦は教室に通はせ實地演習に充て別に產室を設置し臨月に係る姙婦は入室せしめ內外共に實地の練習をなさしむる等大に進歩の兆を現出したり又該入室姙婦は內規を設け親切丁寧に取扱ひ且つ養育料をも給與する事とし看護は生徒の交番となす。

●三重縣通信

●學友會　三重縣尋常師範學校卒業生より組織したる西濃同友の兩會相合同して學友會てう新團体を形ち造れり。

●歌會　毎月一回津市西堀端に於て岡夏胤氏を師とし歌會を開らく(男女混合)。

女報

可愛子編

●岡島女殿下　去る一日より、大磯なる松林館に御滯在あらせらるゝ常宮、周宮の兩內親王殿下は、御滯在日數、凡そ五週間の御豫定にて、來月七日頃、御歸殿の筈なりと承はる。

●伏見宮御歸京　故宗譯女王御會葬の爲め、京都に赴かれし、伏見貞愛親王殿下には、去る二日午前十一時三十五分、七條停車塲發の汽車にて御發途、同夜は名古屋に、三日は靜岡に、御二泊にて御歸京。

●明治女學校　の職業部に於ては、婦女子をして、自營自治の道を得せしむる爲め、來る二十日より別に女子主計科を設置す。

●裁縫傳習所　女子と職業、其間甚だ大切の關係あり、吾人は明治女學校の職業部立ちしを喜びたりしに、今又之を聞く、神田仲猿樂町二丁目五番地なる東京女學校內に於ても、此度裁縫傳習所を新設し、目下生徒は二十名なるも、猶數名を募集する由、學校の主幹は目下部三之助氏、教員は三宅さう子外數氏なりと。

●遞信省に女子を雇入る　日本の女子は、これまで印刷局などの職工となりたる位にて、其他の公務に從事せし事はなかりしが、昨年電話交換開始以來、交換局の技手には少女をのみ雇入れられしに、元來女子は事務綿密にして、殊に日本の女子は生活も低廉にして、其給料も男子よりは廉に雇入るゝを得る事なれば、遞信省にては此頃より電信頼信紙の取調べ等に、數名の女子を雇ひたり。

●慈善諸舞會の決算　翁鹿鳴館に於て催せし貴婦人慈善諸舞會の決算は、舞踏會贊助者に寄附金等、總金額三千〇三十一圓九十五錢にして、內諸舞會入費及立會井酒料其他諸入費高、金四百四十七圓を引去り、金二千五百八十四圓九十五錢の內、赤十字社病院に入院の貧困患者八名に對する、一ヶ年間施療費に充つる目的にて、同社へ寄附金千五百四十八圓、本所發育院に在る貧者に衣服を給する目的にて、同院寄附金四百圓、本所安全堂產院の諸費を補助の目的にて、同院寄附金百圓、三口の合計金を引き、殘金五百三十六圓九十五錢は、病院寄附の豫備として、三井銀行に預けたり。

●津田夫人の葬儀　貴族院議員津田出氏の夫人大蔵氏の葬儀は、去る七日行はれたり、同夫人は十六歲の時津田氏に嫁し、相偶四十三年、世にも淑德高き夫人なりしと。

●藤井夫人の遺骸到着せり　米國紐育在留の、日本領事藤井三郎氏の夫人は、此程同地に於て、病死したるを以て、右遺骸は、去る八日桑港より入港せし便船にて到着したるに付き、豫て出港し居たる親族の人々は、去る九日東京に持歸りしとぞ。

●下婢增加して賃金下落す　一時流行感冒の爲めに、俄然下婢の拂底を來せしが、此頃に至り、何れの雇人受宿も、下婢增加し、今は下婢の方にて主人を搜すやうになり、給金も大に下落せり。

●失踪の婦女　警視廳に於て、去月三十一日取扱ひたる、失踪の婦女は四人なりしといふ。

●東京府下在留の外國婦人　昨年十二月三十一日、府下在留外國婦人現在の數は二百八十名にして、開市塲內外、住所、及び其國籍の別を揭ぐれば、開市塲內に住居するもの、總員八十八名、內淸國人七名、佛國人七名、獨逸國人七名、英國人十六名、米國人五十一名なり、又開市塲外に住居するもの、總員百九十二名、內澳國人一名、淸國人十一名、佛國人三十七名、英國人七十三名、蘭國人五名、伊國人一名、葡國人二名、露國人三名、米國人五十九名なりとぞ。(但一時客舍に止宿する者は玆に算入せず)

●名古屋淸流女學校　には、本年初春より、東京女子高等師範學校卒業生なる、安齊れつ子出校し、專ら家政學の教授を擔當せらるゝとの事なり。

●結婚　名古屋師團に長たる黑川中將の令孃千春子は、先頃華族女學校を卒業したるが、中將は今度列亦須山積氏を撰びて婿養子となし、一夕の婚儀、二千圓餘りを費したりと、中將は固と貧苦の中に人となり、今の夫人と婚せし時の如きは明日の糧もなき迄にて、其翌日は中將疾く起き出でゝ、親戚の許に趣き漬物を請ひ受け來りて、纔かに其日を暮せしほどなりしといへば、今其愛孃の婚儀に當りては、中將まさに今昔の感あるべしと、同地の或る人は云ひし由。

●前號に記載せし京都婦人教會　の總會には、雨天なりしも、來會者三百餘名あり、會長松岡鍋子、大谷旭子の祝辭もありたりといふ。

●婦人友愛會　同會は、家事經濟及び教育の一端を知らんとする婦人の爲めにとて設けられたり、假事務所は、大阪北區中の島宗是町三十二番邸にあり、同會の

◎靑年の變死——岐阜縣電報　岐阜縣に於て、熱心なる廢娼運動者四久保鉄次郎氏は、二月五日無慘の死を遂げたり、享年二十二歲、其致死の原因未詳、追而詳報すべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

機關として、毎月二回婦人教育雜誌といへるものを發行せんとす、發起者は小笠原松枝、町田つる、小川はま三氏にして、何れも東京高等女子師範學校の卒業生にして、今は幼稚園保姆となりたる人、及び尋常師範學校の教員たる人なりとぞ。

●十年慰勞會　時は去る一月三十一日、處は神戸英和女學校講堂に於て、同校漢學教授山内松鵠氏が、十年の間勤め續けたるとの慰勞の會を開きたり。

●女學生に徽章を附せんとす　無對育の婦人、淫奔の女子にして、往々女學生の態度を擬するが爲めに、時に圖らざる風聞をさへ傳播せられ、不測の濡衣を着せらるゝ事あるは、吾人の憂ひ歎く所なりしが、此等の慮なからん爲め、長崎尋常師範學校女子部の生徒は、一種の徽章をば、常に胸部に附け、判然たる女生徒の章となさんと、校長に願ひ出たりといふ。

●再び廢娼建議書を提出せんとす　去月十七日、横濱青年會より提出せし公娼全廢請願書は、議院の燒失と共に、一片の煙と化せしにより、佐々木笑受郎氏等は、再び之を提出せんとの心組なりといふ。

●廢娼議會　茨城縣水戸青年の組織にかゝる三育會にては、今度廢娼議會を設立し、其運動の第一着手として演說會を開く由。

●北總廢娼同盟會起る　茨城縣西葛飾郡に於て北總廢娼同盟會設立せらる。

●存娼雜誌又出でんとす　愛娼叢誌と呼べる存娼雜誌は、又府下牛込よりして出でんとす、彼れ下らぬ廣告をなして得々たり、自ら其良心に問ふて耻かしくはなきや。

●布哇國に於ける日本婦女童幼勞動の割合及び給料　布哇に於て、婦女及び童幼の勞動するものゝ割合は、葡人二割五分、南人五割六分にして、日本人七割二分なりと、又其給料は、葡人十弗三十二仙、獨人九弗九十五仙、南人七弗八十仙にして、日本人八弗五十四仙なりといふ。

●老婦人の銀行頭取　世界中にて、最も老ひたる銀行頭取者は、デボラ、パチルスと云ふ婦人なるべし、本年九十九才にして、合衆國ランシングボルクのデボラパチルス銀行の頭取なり、其事務を取扱ふや、少しも壯年の時に異ならず、同人は又此老ひたる婦人の爲めにとて、デボラパチルス館といへるものを設立したる由。

●英國女流農學に熱心なり　此頃ケンブリッヂ大學の地方高等試驗執行のせつ、農科入學試驗を受けしもの、ビイルミングハムに於ては男子三人、女子四十一人、ブラッド、フオールドに於ては、女子二十四人、男子唯だ一人、リーヅに於ては、女子三十五人、男子二人、マンチエスターに於ては、男子一人、女子四十二人、リバープールに於ては、五十九人の女子と、一人の男子にして、合計男子八人に、女子二百〇一人の受驗者なりし。

●佛國人民結婚の必要　佛國の代議士、パベリエ、ジヤヷの二氏は、法律を以て佛國人民に結婚を促さんとし、且婚姻者の年齡を相應せしめんと、專ら盡力中なるが、其主眼とする所は、小兒の出生を增加せしめんとするにある者にして、近代佛國に於ては、獨身及び未婚の婦女其數非常に增加し、又配偶者の間にも小兒の出生せると少きは、畢竟男女婚姻年齡の相應せざるに因り、斯くの如き有樣にして打續かば、佛國の人口は次第々々に減少するは必然なりと、頗る憂ふる者の如し、最もパベリエ氏の說は、佛國人民にして三十五歲に及びても結婚せざる者は、國家に對し、後世に壯丁を備ふるの義務を缺く過料として、幾分の稅を課せしむべしと云ひ、又ジヤヷ氏は、有妻の佛國男子、若くは有夫の佛國婦人にして、七人の小兒を有する者は、政府より特別の加護を與へて、或る稅を免じ、其子をして、無謝義にて、大學校へ入學脩業せしむるを得せしむべしと云へり。

●露都未婚者の數　露都ペテルブルグ府に於ても、人民は甚だ結婚を望まざる者の如し、戶籍人別を調査せしものゝ言によるに、ペテルブルク府のみにて、結婚時期に達して未だ配偶を得ざるもの、男十五万四千人、女十七万二千人合計三十二万六千人なりといふ。

●スポルジヨンの諷刺　識なく、學なくして、身宣教の大任を負ふの愚人を常に嫌へる、高名の傳道師スポルジヨン、かつて己が子弟に講義せる時、先づ言ひけらく、或人其知れる宣教師を評して蛎よりも能なきものと云へり、我思ふには蛎をいたく卑めたる語なり、蛎殼の口は常に謹愼を表はし、よし開くとも必ずその閉づべき時を知れり、これ似非教師に比ぶべくも非ずと、世には蛎にも劣る人多きにや。

●襤褸より砂糖を造る　ことは現時ゼエルマンに於て行なはれ居るなり、ふるき襤褸は硫酸鹽を用ひて、これを巧に變化せしめ、然して石炭の一ミルクを用ひふたゝび新しき硫酸鹽をもつて砂糖を得るなり、かくして得たる砂糖は、今日迄有來りし品と少しの異る處を見ずと云ふ。

●編者白す　寄書、通信等は、なるべく無用の文句を省略し、簡にして盡せりといふ樣にして、御送り被下度、然らざれば、餘白に乏しき爲め、殘念ながら、揭載不仕候。

週報

●官令二月三日詔勅を以て貴族院爵子議員一名闕員の爲めに補闕撰擧を行ふべきとを命ぜらる。

●政治　三日關西二十二州立憲自由黨懇親會開く●四日立憲自由新聞發行停止せらる●五日國民自由黨評議員會開く●五日華族會舘にて伯爵議員の補欠撰擧あり萬里小路通房氏當撰す●七日内閣會議●十日清國公使學經芳氏國書捧呈として參内す●十日衆議院に於て山縣總理大臣演說す。

社友新戸邊(元太田)稲造氏は毎度本誌に投書ありたるエルキントン女史を娶り去十日歸朝二週間后に札幌に趣かるべし

福音週報

毎金曜日發兌

我福音週報は微弱の身を以て多難の宗敎界に生れ出で眇々の聲を發してより以來僅々數閱月に過ぎざるに江湖の愛顧過分に篤く發達の程度望外に出で今や將に宗敎界の一大勢力たらんとす依て今後社員は一層の奮勵を加へ材料を精撰し行文を平易にし**讃美歌**の欄内に於ては奧野、戸川の兩氏艶麗の文を以て優美の詩情を書き出し社說には植村正久氏勇健の筆を以て直截活潑の思想を寫し出し**家庭雜錄論說說敎等**勉めて信者の生命に有益の糧を集め其他泰西の宗敎界に起れることにして信者の最も注意を要する事を報ぜんがため**外信**の欄を設け電報若くは最近に著したる新聞紙に基きて重要の事項を記載し**或は史談**と云ひ**或は靜思の時**といひ凡て信者の德を建て智を研くに必要なるものは網羅して殘す所なからんとす願くは益愛讀を垂れ玉はんことを。

第四十七號目次(一月三十日發兌)

◎福音週報○追悼紀念會◎敎報○數件◎論說○斷して神學生に貸費の制を廢すべし(小山登)○予は何を爲さんか(岐阜生)○聖書に就て(K.S)◎雜錄○野夫の經濟論○一口噺○貧旅院の記(下)○太田錦城の逸事◎基督のすがた○家庭に於ける基督◎家庭○愛はいつまでも落つることなし○忠義なる婢(六)○小說、與如の月◎寄書○大坂に於ける初週祈禱會(大坂、淡街散士)○謹て先覺の示敎を仰ぐ(東京、遠藤雜誌)◎廣告數件

福音週報定價表

市内無郵税(前金)		市外郵税共
一部	二銭五厘	三銭
十三部 三ヶ月分	卅一銭五厘	卅八銭
二十六部 半ヶ年分	六十銭	七十二銭
五十二部 一ヶ年分	一圓十四銭	一圓四十銭

發行所 東京麴町區三番町十番地 福音週報社

小生儀去月中獨逸國ヨリ歸朝致候處今般左記ノ番地ニ於テ**婦人科產科**ノ診察治療ニ從事致シ候
但シ診察時間正午十二時ヨリ午后三時マデ
麴町區永田町壹丁目七番地
醫學士 **鈴木愛之助**

看護婦生徒募集日限改正廣告

看護婦生徒志願ノ者ハ來ル三月十日迄ニ願書並ニ履歷書差出スベシ
廿四年二月
東京慈惠醫院

每月一回(十一日)發行

(速記彙報)

正價一冊八銭 ● 十二冊前金九拾銭 ● 全國無遞送料

紀元節發行速記彙報第廿七冊には某速記者が獨逸博士の需に應し起草せし帝國議會に於ける速記術と題せる記事、大山後藤樺山芳川**四大臣**辻白根兩次官中島津田正副議長楠本岡山片岡高田新井大江石田末松關大谷木河島犬養大岡菅其他廿餘諸**議員**演說仕方批評獨逸來簡、速記術に關せる**俳句**、其他論說雜錄問答雜報等數十件を揭載す。

東京神田區裏神保町一番地
速記彙報發行所

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ**百卷**をば僅に**一圓五十錢**にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生する分八十冊にて**金一圓の**割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ買人を要する義にて其内撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる、「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家内經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸内の戰死」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子敎育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲獻身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵税六錢
並製淡裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し　遣物に宜し
歌留多遊びに宜し　詠歌に宜し

此百人一首講義は、歌の意味、文法、を極く分るやうに說明し、其上詠み手の畧傳と其歌を詠みたる時は何如なる塲合なりしかを一々分說し、小倉山紅葉の色々を一ときわにして、千古口に暗誦したる歌の心に、大光彩を發たしむ。此講義を讀みて后ちに歌を朗吟すれば、味ひ新たなり、かるた遊びにも、歌の修業にも、遣ひ物にも、正月中の讀物にも、至つて宜し。

女學雜誌社

全國廢娼同盟會事務所轉居 如左

東京牛込區田町二丁目四十番地　飯野吉三郎氏内

女學雜誌新年附錄 ある第二百四十六號は賣切 に付き候

右附錄即ち「知盛卿」「こわれ指環」の二章のみを別に製し賣價三錢、郵税二錢にて需めに應ず。今や好評續々踵を接して來るの際、絕版は如何にも殘り惜しく、不取敢如斯。

若松賤子 忘れ形見

若松賤子**忘れ形見**は去年中の小說の最傑作なりと不知庵主人の評あり、本年の女學雜誌附錄あるに付き、更に之を想ひ起して彼此と評せらるゝの人多く、注文問合の仁あり、右忘れ形見掲載せし女學雜誌は、田邊花圃女史、中島俊子女史、下田歌子女史著の詩歌小說を附錄とせし一大册子にして定價依然六錢なり。殘部尙ほ五六十部有之に付需めに應ずることを得。

附錄女學

女學雜誌直注文の人には、毎月初土曜日に發兌する十六頁物の附錄女學を添え無代にて呈上す。附錄女學の既に發兌したるもの三號あり、一號には若松賤子女史の英文、雲峰子の長歌、小島官吾氏の論文を掲げ、二號には安藤太郎氏の禁酒演說筆記を載せ三號には雲峯子が新譯盲女行の長韻文を載す。右直注文以外の人には、一冊四錢づゝにて賣捌くと云へども、今后直注文被成候仁は、其以前の分を右定價にて買受たる后ち以後の附錄は無論無代價なる事。

定價

一冊。	六錢	郵税。	五厘	(但府内無郵税)
十一冊。	五拾八錢	郵税。	五厘	(同　前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は		壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は		貳圓八拾六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三